

## ブラームス / ピアノ協奏曲第2番 変ロ長調 Op.83

ピアノとオーケストラが対抗し、競い合いながら音楽を作り上げるのがピアノ協奏曲本来の姿であるとするならば、ヨハネス・ブラームス（1833-1897）の2つのピアノ協奏曲はそれを超えた作りになっている。同時代の批評家、E. ハンスリックが「ピアノを伴う交響曲」と呼んだとおり、独奏楽器であるピアノがオーケストラの楽器の一つのように扱われ、両者が一体となって重厚な音楽を作り上げているのである。第1番は1859年、ブラームスがまだ駆け出しの頃の作品だったが、第2番はそれから20年余り後の1881年に完成された円熟期の作品である。ウィーン郊外のプレスバウムで作曲が進められ、同年11月9日、ブダペストでブラームス自身の独奏で初演された。協奏曲でありながら4楽章構成の大協奏曲であり、その雄大さはブラームスが尊敬してやまなかったベートーヴェンの交響曲さえ思い起こさせる。そして何よりピアノとオーケストラの一体感がすばらしい。たとえば第1楽章では冒頭付近から独奏ピアノのカデンツァ風パッセージが幾度も登場するが、きらびやかな技巧の見せ場というより、主題の展開そのものに大きく関わっている。また、第2楽章、第4楽章では冒頭からピアノが音楽の先導役を果たしている。第1楽章アレグロ・ノン・トロppo、変ロ長調ホルンの牧歌的な第1主題に独奏ピアノが美しい和音で応答し、最初のカデンツァ風の部分のあと、あらためて第1主題が総奏でさっそうと響き渡る。この第1主題と、ヴァイオリンで始まる短調の第2主題に基づいて音楽が発展していく。第2楽章 アレグロ・アパッショナート、ニ短調交響曲のスケルツォにあたる楽章。通常の第3楽章ではなく第2楽章に置いたのは、ベートーヴェンの「第九」と同じである。第3楽章 アンダンテ、変ロ長調独奏チェロが入った、ロマン的情緒にあふれる優美な緩徐楽章である。第4楽章 アレグレット・グラツィオーソ、変ロ長調舞曲のように活発だが、親密な語りかけのような趣きをもつ終楽章。

遠山菜緒美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。